

令和元年 11月号

◆荒井類 選

読者から、「たいていの滑稽俳句は出尽くしたような気になっておりましたが、まだまだ知らない滑稽句があり、俳句は本当に奥が深いな～、新しい切り口でのご紹介、有難いな～、としみじみ感じております」とのお便りをいただいた。

滑稽句は時々刻々と生み出されているのだから、「出尽くした」というようなことにはなるはずもない。そのことを具体的に例証したい。

《言葉遊びの句》

虎の尾を踏みぬしことに気づきけり 大久保橙青

「ホトトギス季題便覧」に掲句を見いだした時には笑った。言葉遊びの一句と見てとったからだ。

「虎の尾を踏む」という成句がある。「きわめて危険なことをするたとえ。(広辞苑 第七版)」だ。掲句はそれを踏まえ、季語「虎の尾(植物)」を「踏んでいることに気づいた」という表面上の意味と、「きわめて危険なことをしていることに気づいた」という裏の意味を持つ、ダブルミーニングの一句。

「ホトトギス季題便覧」の「とらのお【虎尾草】」の項に例句は二つ。貴重な例句のスペースの半分を、かかる言葉遊びの句に与えるとは、ホトトギスの人々も、滑稽俳句に理解が深い？

《言葉と実態のギャップに滑稽味》

百足虫出づ罪なき子らは石を投げ 中島やさか

罪なき百足虫に石を投げる子らは「罪深い」ことをしているのに「罪なき子」？このへんの言葉のあやに作者の批判精神が表れているように思う。「罪なき子ら」の「罪深い」行い。「無邪気な子ら」の「邪気(悪意)ある」行為。「無垢(けがれなき)の子ら」の「垢(けが)れに満ちた」言動。「垢」の字の第一義は、「あか」=活力を失った皮膚の表皮や脂・汗・ほこりの混合したもの(広辞苑第七版)。

言葉と実態のギャップに滑稽味が感じられる。子どもは結構残酷なものだ。

おお蟻よお前らの国いじめなし 小林凜

尺取虫一尺二尺歩み行く 小林凜

《読者投句欄「特選」句の滑稽》

追風に尻をあふられ羽抜鶏 中瀬安子

ある俳句雑誌の読者投句欄で「特選」（選者・檜紀代）になった句だ。（この雑誌では各選者の「特選」は三句ずつで、掲句はこの選者の「特選」筆頭）。「ただでさえ羽が抜けて無様な鶏の姿に哀れさが高じて、滑稽味が出ました。（選評より）」。

三月や真横に飛びぬ犀の尿 山田史子

掲句はある雑誌（俳句雑誌ではない）で、対馬康子の「特選」を得た。（この雑誌では各選者の「特選」は一句ずつ）。「分厚く固い犀の皮膚の対比が面白い。思わず笑ってしまう句。（選評より）」。

柏餅ついでに吾の誕生会 をがはまなぶ

間違へて華の五月に生まれ来し 竹山繁治

選者の正木ゆうこの選評にもあるように、「ついでに」「間違へて」が可笑しい。

《一読破顔の句》

新樹ならびなさい写真撮りますよ 藤後(とうご)左右(さゆう)

学校の遠足で、先生が「新樹」という名の生徒に呼びかけている、訳ではない。「新樹という自然との自在な交歓が楽しい。（選者・寺井谷子）」。三・六・八、あるいは九・八の破調だが、全体は十七音におさめてある。一読破顔（顔をほころばせて笑う）のおかしみ。

《自分の様子を滑稽化》

人間の海鼠(なまこ)となりて冬籠る 寺田寅彦

海岸の岩場や魚屋の店頭で、海鼠を見たことのある方は多いだろう。ぐにゃりとしていて、その容姿はあまり気味のよいものではない。向井去来が「尾頭

の心もとなき海鼠かな」と詠んでいるが、どこが尾なのか頭なのかもわからぬ。

生きながらひとつに凍る海鼠かな 松尾芭蕉

小室善弘によれば、「(寅彦の掲句は) 冬籠りして身をちぢめ、あまり動かない自分を、その海鼠になぞらえ滑稽化したもの」とのことである。

《海鼠の口が裂けている理由は？》

ここでトリビア。問の答は、古事記の神話に…。

天宇受売(あめのうずめの)命(みこと)が海の魚を集め、「天つ神の御子に従うか？」と聞いた際、皆「従う」と言ったにもかかわらず、海鼠だけは返事をしなかった。これに天宇受売命は怒って「この口は答えぬ口か」と紐(ひも)小刀(がたな)(細い紐を鞘につけて懷中に納めた小さな刀)で海鼠の口を切り裂いた。そのために今でも海鼠の口は裂けているという。

このわたに唯ながかりし父の酒 松本たかし

以上、「滑稽句は時々刻々と生み出されている」ことの例証となり得ただろうか。

(文中敬称略)